



TITLE:

京大広報 No. 470

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 470. 京大広報 1994, 470: 810-819

ISSUE DATE:

1994-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209164>

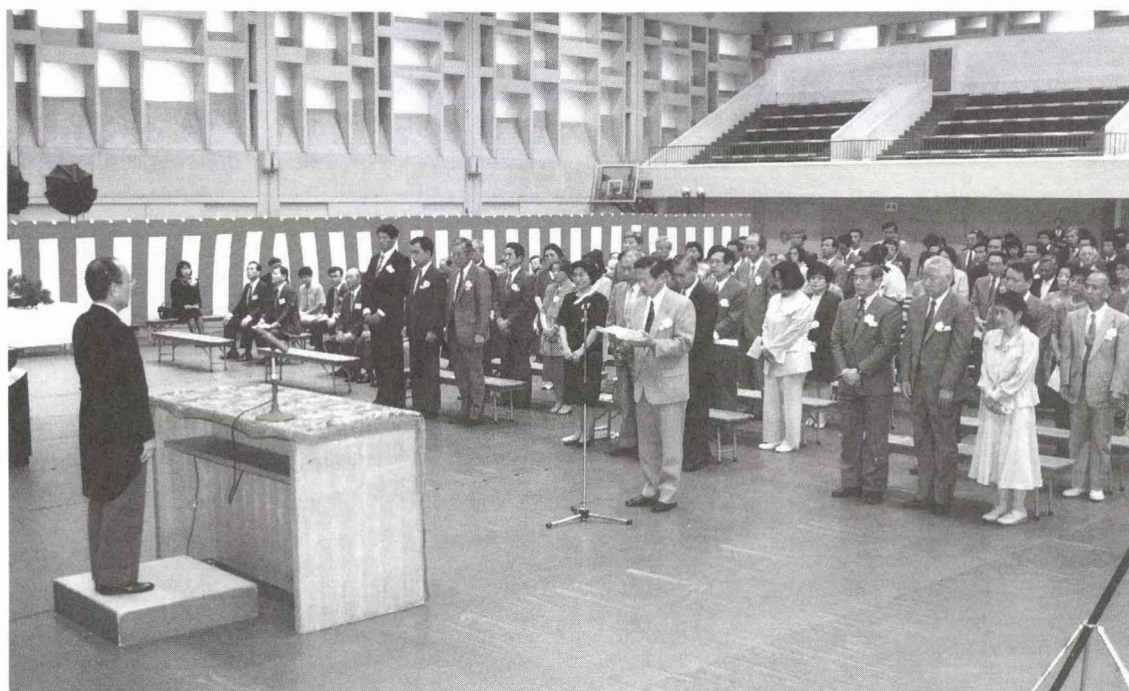
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 470

京都大学広報委員会



創立97周年記念式典 —関連記事本文811ページ—

目 次

<大学の動き>

創立記念式典の挙行……………	811
部局長の交替等……………	811
医療技術短期大学部部長の交替等……………	811
外国人留学生歓迎パーティー……………	811

<栄誉>

佐竹昭廣名誉教授が紫綬褒章を受章……………	811
-----------------------	-----

<紹介>

経済学部論文入試調査報告書の刊行……………	813
-----------------------	-----

<保健コーナー>

退行について……………	814
「白馬山の家」の夏季開設……………	816
「白浜海の家」の利用……………	816
計報……………	817

<随想>

小泉八雲の孫たち	名誉教授 小野木重治	818
----------	------------	-----

<コラム>

京の町について近頃想うこと	有賀 健	819
---------------	------	-----

<大学の動き>

創立記念式典の挙行

6月17日（金）本学創立97周年記念式典が、名誉教授、部局長等関係者多数の出席を得て、本学総合体育館において挙行された。

式典は午前10時に始まり、総長式辞、永年勤続者の表彰、永年勤続者代表の答辞があり、本学の発展を祈念して、田中周友名誉教授の発声により万歳三唱が行われ、午前10時35分終了した。

本年の被表彰者は216名であり、うち30年勤続者は160名、20年勤続者は56名である（被表彰者氏名は6月24日の学報第4524号に掲載されている）。

総長は式辞の中で、これら永年勤続者の労をねぎらうとともに、現在本学が抱える課題を提起し、21世紀に向けた改革のあり方及び大学が果たすべき役割を提言した。

引き続き午前11時30分から京大会館2階会議室で名誉教授懇談会が、また午前11時50分から同会館1階講演室で永年勤続者祝賀会がそれぞれ開催された。

部局長の交替等

高等教育教授システム開発センター長

高等教育教授システム開発センターの新設に伴い、岡田渥美教育学部教授（教育史講座担当）が6月24日同センター長に任命された。任期は平成8年3月31日までである。

医療技術短期大学部部長の交替等

上羽康夫医療技術短期大学部部長の任期満了に伴い、その後任として高橋清之医療技術短期大学教授（作業療法学科）が7月1日任命された。任期は平成8年6月30日までである。

<荣誉>

佐竹昭廣名誉教授が紫綬褒章を受章

佐竹昭廣名誉教授（元文学部教授、上代文学・中世文学）に、我が国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより、平成6年4月29日紫綬褒章が授与された。

外国人留学生歓迎パーティー

本年4月に入学した外国人留学生の歓迎パーティーが、6月8日（水）午後6時から、京大会館において外国人留学生、総長及び指導教官等約230名が出席して行われた。

パーティーは、井村総長の挨拶ではじまり、瀬地山学生部長の発声による乾杯、新入留学生のスピーチなどを交え、終始なごやかな雰囲気の下に午後7時30分閉会した。

なお、平成6年5月1日現在の本学の外国人留

学生の総数は、892名であり、国（地域）別の内訳は別紙のとおりである。



国（地域）別外国人留学生数調

平成6年5月1日現在

国（地域）名	学部	大 学 院		研究 生等	計	国（地域）名	学部	大 学 院		研究 生等	計
		修士	博士					修士	博士		
アイルランド			1	1	2	デンマーク		1		2	3
アメリカ		4	6	20	30	ドイツ			3	21	24
アルゼンチン				1	1	ドミニカ共和国				1	1
アルバニア			1		1	トリニダードトバゴ				1	1
イギリス		2		4	6	トルコ		1	1	2	4
イスラエル			1		1	ニカラグア			1		1
イタリア			1	3	4	ニュージーランド	1	1			2
イラク			1		1	ノルウェー				2	2
イラン			2	1	3	パキスタン			2	3	5
インド			3	3	6	ハンガリー				2	2
インドネシア	1	24	15	4	44	バングラディシュ		4	5	3	12
エジプト			4	2	6	フィリピン	1	8	6	2	17
エチオピア		1			1	フィンランド			1		1
オーストラリア	3			2	5	ブラジル	1	2	4	4	11
オーストリア			1	2	3	フランス	1		1	6	8
オランダ			1		1	ブルガリア			1	1	2
カザフスタン		1			1	ベトナム	1	2	2	1	6
ガーナ			1		1	ベネズエラ			1		1
カナダ		1		3	4	ペルー		1		1	2
韓国	3	30	85	44	162	ベルギー		2		1	3
グルジア			1		1	ポーランド			1	2	3
ケニア			2		2	ポルトガル				1	1
コロンビア		1	2		3	香港	1	1	2	2	6
シンガポール	4		1		5	マリ			1		1
スウェーデン				1	1	マレーシア	13	4	1	2	20
スーダン			1		1	ミャンマー		2	5	3	10
スペイン		1	1	1	3	メキシコ		3	1	1	5
スリランカ		1			1	モロッコ			1		1
タイ	5	10	10	4	29	モンゴル		1		1	2
台湾		14	22	14	50	ユーゴスラビア			1	1	2
タンザニア		1	3		4	リトアニア			1		1
チェコ				3	3	リベリア			1		1
中国	51	53	110	121	335	ルーマニア	1				1
チリ		2		1	3	ロシア			4	2	6
小計	67	146	276	235	724	合計	87	179	323	303	892

(注) 国（地域）名は通称による。

(学生部)

<紹介>

経済学部論文入試調査報告書の刊行

経済学部は昭和63年度以来、学部生選抜試験の一つとしていわゆる「論文入試」を実施しており、平成6年度で7年目を迎えた。しかも、初年度はA日程で、次年度に「分離・分割」方式が採用されてからは、一貫して前期で行ってきた。幸いにして平成5年度文部省教育方法等改善経費による助成を受けることができたので、8名の教官から成る調査委員会（代表 尾崎芳治教授）を設け、1年間をかけて追跡調査を行った。調査では、まず予備調査として論文入試入学者データベース作成、学部教官に対するアンケートを行った後に、本調査を昭和63年度から平成5年度の論文入試入学者及び一般入試入学者の全数成績追跡調査、平成5年度に在籍する全論文入試入学者及びこれとほぼ同数の一般入試入学者に対するアンケート（回答率はそれぞれ53%、41%）の順で行い、さらに高等学校進学指導担当者（関東・関西9校）、予備校論文入試担当者（3校）、論文入試入学生、論文入試出身大学院生との座談会をそれぞれ行ってデータを補強し、最後に経済学部教官座談会でもって総括した。この調査結果がこのほど『京都大学経済学部論文入試の成果と課題 総合力と創造力を求めて』と題する冊子にまとめ上げられた。

調査結果の中から要点を抜粋すると次のようになる。

- (1) 入学試験の成績と入学後の成績との相関関係は、入試センター試験成績（総得点、外国語・数学得点）と入学後の語学及び数学の成績との間に認められる。
- (2) 英語（外国語）と数学の成績では、論文入試入学者（以下、「論文」と略記）は一般入試入学者（以下、「一般」と略記）に劣る。
- (3) 成績の分散は概して「論文」が「一般」より大きい。
- (4) 「論文」は女子、浪人・大検、関東以北出身者、自営商工業家庭出身者、下宿者の比率が「一般」より高い。
- (5) 高校時代に勉強にもっとも没頭した者は、「論文」が10%、「一般」が24%である。これ

に対してクラブ・サークル活動にもっとも没頭した者は、「論文」が58%、「一般」が46%である。

- (6) 高校時代に数学を得意とした者は、「論文」が22%、「一般」が43%である。これに対して国語を得意とした者は、「論文」が52%、「一般」が24%である。英語については数学と国語の中間に位置する。
- (7) 高校時代の読書経験について、「よく読んだ」とする者は、「論文」が55%、「一般」が13%である。
- (8) 高校時代の所属クラブ・サークル種別は、「論文」がスポーツ系49%、非スポーツ系63%であるのに対して、「一般」がそれぞれ79%、26%である。
- (9) 論文入試選択理由（複数回答）で、「論文を書くことに自信があった」等の積極派が50%を占める一方で、「一般入試では困難」とする者が22%、「センター試験の点数が悪かった」とする者が18%に上る。
- (10) 学生生活でもっとも重点を置くものとして勉強・研究を挙げる者は、「論文」が23%、「一般」が14%である。これに対してクラブ・サークル活動を挙げる者は、「論文」が20%、「一般」が32%である。
- (11) 講義の理解度について、外国語をのぞく一般教養科目、必修科目、選択必修科目、選択科目では、「わかるものが多い」とする者は、「論文」がすべて50%を超え、「一般」がすべて50%を割っている。これに対して外国語の理解度は、「一般」が「論文」を上回る。
- (12) 個人的研究テーマを持つ者は、「論文」が55%、「一般」が21%である。所属クラブ・サークル種別は、「論文」がスポーツ系31%、非スポーツ系27%であるのに対して、「一般」がそれぞれ51%、19%である。
- (13) 読書が「好き」とする者は、「論文」が78%、「一般」が34%である。これに照応して、アルバイト収入の主要使途として書籍代を挙げる者は、「論文」が38%、「一般」が19%である。
- (14) 卒業論文執筆意欲について、「書きたい」とする者は、「論文」が52%、「一般」が27%

である。

- (15) 4年で卒業したい(したかった)とする者は、「論文」が57%、「一般」が81%である。これに対して留年希望者は、「論文」が20%、「一般」が5%である。

- (16) 卒業後の進路について、民間企業、資格試験を要する職業、大学院(シンク・タンクを含む)、その他を希望する者は、「論文」がそれぞれ36%、35%、26%、16%、「一般」がそれぞれ54%、36%、13%、4%である。

以上の調査結果から、「一般」とは異なる特性を示す「論文」の型が検出できた。しかも、「論文」は高校時代までに培った素地に、新しい環境の中で新しい要素を加え、自らを一つの新しい型に造り変えている。すなわち、大学生活の中で留年をしてまでも時間をかけて自己の可能性を広くかつ深く追求し、将来をたとえ不安定ではあっても開かれたものにしておきたいとの志向を比較的強く示す「論文」と、人生の不確定要素をできるだけ排除して、堅実な将来設計を試みようとする「一般」との、対照的な学生類型を認めることができるのである。高校時代に「読書型」と「勉強型」という相違を見せた「論文」と「一般」は、入学後に「企業家型」と「官僚型」に型の鋳直しを行ったといえよう。しかも、両者が相互に批判し合うだけでなく高く評価もし合い、相互に学び合おうという姿勢を見せていることを確認しえた

ことは、本調査の大きな収穫の一つであった。

他方で、「論文」を受け入れた経済学部 of 教育・成績評価方式や、「論文」の一部の経済学学習に対する適性等に問題が残っていることも、本調査によって明らかにされた。

ちなみに、「論文入試」は例年3部に分かれ、初年度は1日だけで6時間、次年度から2日をかけ、8時間にわたって行われている。配点小計は800点で、入試センター試験配点250点と合わせて総点1,050点の76.2%の比重を占める。平成6年度の試験問題の内容は次のようなものであった。論文Ⅰ(1日目午前9時30分～12時30分)は、W.リップマンの『世論』及びM.ウェーバーの『職業としての学問』からの抜粋(前者は一部英文)を読ませ、三つの設問により両者の見解について論じさせた。論文Ⅱ(1日目午後2時～4時30分)は、不確実な状況に対してデータが意思決定をより確かなものにしていく過程を、四つの設問により確率論的に計算、証明させ、また論じさせた。さらに、生物社会における生存競争のモデルを考察させ、平均期待利得を計算させた。論文Ⅲ(2日目午前9時30分～12時)は、R.ベネディクトの『菊と刀』及びE.S.モースの『日本その日その日』からの抜粋を読ませ、三つの設問により両者の見解を対照、解釈させた。

(経済学部 論文入試調査委員会
連絡先、内線3432, 3462)

<保健コーナー>

退行について

退行とは、発達していくものと考えられているある心理過程において、既に到達されたある地点からそれ以前に位置する地点への逆行のことを言う。必ずしも病的なものではなく、家族などに赤ちゃん言葉を使ったりすることは、よく有ることだ。

今春、フランスから帰ってみると、日本が退行を促す国のように思われた。フランスでは、良くも悪くも建て前として「個」であることが求められる。「建て前」と書いたのは、フランス人は結構群れるのが好きな人達だからだ。)メトロに

乗っても、車内放送など殆ど無い。もし有ったとしても、故障かストで電車が来ないというものばかりだ。乗り間違えてもそれは、「個」人の責任となる。ところが、日本に着き空港からのバスに乗ると、行き先から料金の払い方まで懇切丁寧な車内放送が入る。降り際に、足元に気をつけてうんぬんという放送を聞いたときなど、一瞬この運転手さんは、僕の父親かしらという思いが心をかすめた。

病気になっても、フランスでは余程しっかりしていないと立派な病人にはなれない。と言うのも、救急は別として、普通に病院にかかる場合次のような手順になるからだ。まず予約が必須。そして医者のある診療所にいく。そこは、大抵マン

ションの一室のオフィスで、いわゆる病院臭さは全くない。当然、検査機器もない。そこで医者への指示をもらい、検査に行くわけだが、しばしばX線検査と血液検査が別の所（これもマンションの一室のような事務所だ）であったりする。数日後、結果を取りに行く。すると、同じことを書いた紙を2通くれるはずだ。1通は患者のため、もう1通は主治医のためで、本来医者へは郵送することになっているのだが、患者を郵便配達人として使うことが一般に行われている。とにかく、その結果を持ち、予約を取って、もう一度診療所に戻る。医者は、色々丁寧説明してくれるだろう。この説明も、聞き逃してなどいられない。納得するまで気を張って聞く。黙っていると、納得したものと思われ、後で問題が起こったときそれは説明して同意したではないかと言われるからだ。薬は、既に処方されていることが多いが、検査の結果で変わることもあるだろう。処方箋を受け取ると、薬局へそれを持って行く。薬局の数は、かなり多い。そこで薬を買い、同時に薬の飲み方などの注意を受ける。これで終りて後は家で休んでいれば良いと言いたいが、そうは行かない。これまでの出費は、全て実費、つまり10割負担だから、保険からの払い戻しを受けるために領収書と一体になっている書類を書き、社会保障事務所まで届けねばならないのだ。病気だからと退行している余地は、何処にも無い。翻って日本の医療を考えてみると、待ち時間が長いという不満はあるものの、唯一カ所の病院を出たときはともかくも全てが終わっている。薬をかうことから保険の請求まで、既に誰かがやってくれているからだ。何と大人を子供扱いする制度ではないかと、フランスかぶれして嘆いて見せることも出来るかも知れない。そして、家に帰れば、誰かがお粥を炊いてくれるかも知れず、少し病気が重ければ、それをスプーンで食べさせてもらうくらいの退行は、朝飯前だ。

しかし、退行しやすい社会としにくい社会では、どちらが良いのだろうか。少なくとも、どちらが健康に良いのだろうか。よく考えることが、分らない。

「病は気から」というかなり信すべき諺がある。殊に精神科を専攻する身であれば、殆ど全ての病気の発病に精神的なものが関係しているように思われる。してみれば、退行を許さず、気を強く持たせる社会が、病気に予防的に働くだろう。僕が病院で見てきた人々は、不幸にして既に発病してしまった人々だが、それでも何か日本の病院で見る患者さん達よりしっかりしているように思われた。だから、治療的な意義もあるのかも知れない。今も、ある精神分裂病の女性が退院していくときの横顔が、忘れられない。まだ若く美しい人だったが、長い闘病生活のためか、ムンクの画く女性のように目の下に深い隈が出来ていた。彼女は、家が無く、無論彼女のような立場の者にアパートを貸す人として無く、これからホテルへと退院していくのだ。両親は居るが、日本のように引き取りに来たりしない。彼女はもう大人なのだ。精神病院は、入院する前と、退院する前が怖い。きっと内心は、不安に震えていたのだろうが、それをわずかに青ざめた固い表情に包み、これから自立して生きていくことへの誇りさえ見せながら、彼女はホテルへと去って行った。

一方で、退行に治療的な意義のあることは、臨床の中でよく経験することだ。多くの人は、退行している内に、何かの力が満ちてきて、終には最悪の状態を抜け出すことが出来るようになる。日常生活においても、我々は、冗談を言ったりレクリエーションをしたりする中で退行し、その退行を通して生まれ変わって翌日からの大人としての仕事に向かうのである。これらのことは、「自我のための退行」(クリス)や「創造的退行」(シェーファー)などの名で、認められてきている。それからすると、日本の社会も捨てたものではない。

個人的には、折角退行しやすい土壌の地に生まれたのだから、それを利用しない手は無いように思う。疲れたときは、肩の力を抜き甘えられる所は遠慮無く甘えればいい。それが日本で健康を保つ秘訣だろう。但し、自分が甘えているのだということとは心の片隅に留めながら。

(保健診療所・武本一美)

「白馬山の家」の夏季開設

本学の学生及び教職員の厚生施設として、例年夏季及び冬季に開設されている「白馬山の家」を、今夏も下記により開設します。

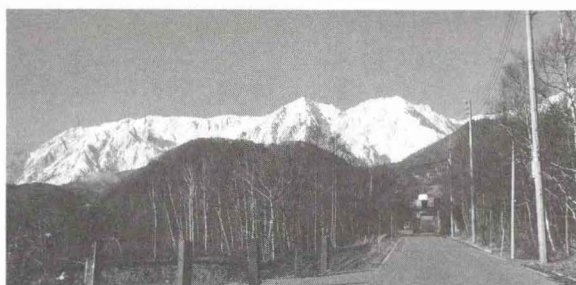
この山の家は、中部山岳国立公園白馬山麓の^{つがいけ}母池高原にあり、雄大な北アルプスの峰々に囲まれ、登山や避暑などに最適です。

なお、建物は山小屋風の木造地上2階、地下1階建てで、間取りは1階が食堂兼談話室、2階が寝室、地階が浴室、乾燥室等からなっています。

記

1. 名 称 京都大学^{はくば}白馬山の家
2. 所 在 地 長野県北安曇郡^{あずみ おたり}小谷村大字千国字柳久保乙869の2
(交通機関) JR大糸線「白馬大池駅」下車、松本電鉄バス「親^{おや}の原^{はら}」下車、徒歩約20分
3. 開設期間 7月10日(日)～8月20日(土)
4. 収容人員 26名
5. 所要経費 1人1泊 使用料120円、ほかに食費等実費
6. 申し込み及び利用に関する詳細

体育会事務室(西部構内総合体育館内、電話 学内2574)に照会してください。



本学白馬山の家附近の雄大な北アルプスの峰々

「白浜海の家」の利用

本学の学生及び教職員の厚生施設として、「白浜海の家」を下記のとおり通年開設しています。

この施設は、三段壁をはじめ千畳敷・円月島など風光明媚な南紀白浜にあり、海に近く、夏は海水浴に最適のところです。

また、「海の家」のある理学部附属瀬戸臨海実験所構内には、500種以上の海の生物を集めた「京大白浜水族館」があり、さらに近くには「南方熊楠記念館」もあります(いずれも有料)。

記

1. 名 称 京都大学白浜海の家
2. 所 在 地 和歌山県西牟婁郡^{しろう}白浜町 京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内
(交通機関) JR紀勢本線「白浜駅」下車、明光バス「明光バス本社前」行きに乗車、終点で「臨海」行きバスに乗り換えて、「臨海」で下車。
3. 開設期間 通年開設
4. 室 数 和室3室

5. 収容人員 30名
6. 所要経費 1人1泊 使用料120円、ほかに食費等実費
7. 申し込み及び利用に関する詳細

体育会事務局（西部構内総合体育館内、電話 学内2574）に照会してください。

（学生部）

計 報

瀬 尾 健 原子炉実験所助手

原子炉実験所助手 瀬尾 健 先生は、6月5日逝去された。享年53。

先生は、昭和39年3月本学工学部を卒業、昭和41年3月同大学院工学研究科修士課程（原子核工学専攻）を修了後、同年4月本学原子炉実験所助手に就任された。

先生の専門は原子核物理学（実験）で、本実験所計測装置研究部門において、原子炉で生成される放射性同位元素を用いて原子核構造に関する研究を行われ、幾多の世界的に高く評価される業績を挙げられた。昭和52年には、核励起準位の核磁気モーメントに関する研究で理学博士の学位を取得された。最近では、超短時間測定法を開発され、ピコ秒領域の核準位寿命の測定を精力的に進められていたことは注目に価する。また原子力災害を的確に評価する手法についても研究を重ねられ、これを通じて社会的活動にも足跡を残された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（原子炉実験所）

篠 原 陽 二 名誉教授

本学名誉教授 篠原陽二 先生は、6月8日逝去された。享年85。

先生は、昭和6年京都帝国大学文学部を卒業され、引き続き同大学院で学ばれた後、滋賀県立師範学校、天王寺師範学校の教諭、東京文理科大学講師、金沢高等師範学校教授、金沢大学教授を経て、昭和28年本学教授に就任、同47年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

この間、先生は、昭和35年1月から同37年末まで本学教育学部長として大学の管理運営に貢献さ

れた。

先生の専門は、ドイツを中心とする西欧教育思想・学説の歴史的研究であり、とくにナトルプの社会的教育学に関する研究ですぐれた業績を残された。主な著書に『ドイツの政治的教育』、訳書にナトルプの『社会的教育学』、『社会理想主義』などがある。先生はまた、日本教育学会、関西教育学会において理事を務められ、学会の運営と発展にも尽力された。

さらに、先生は、その深い学殖と高潔な人格によって、多数の優れた教員と教育学・教育史の研究者を育てられ、その功績には多大なものがある。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（教育学部）

柿 崎 祐 一 名誉教授

本学名誉教授 柿崎祐一 先生は、6月15日逝去された。享年78。

先生は、昭和16年京都帝国大学文学部を卒業後、同24年大阪市立大学助教授、同28年京都大学助教授（分校）、同30年文学部助教授を経て同47年文学部教授に昇任。昭和54年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、昭和54年より平成元年まで甲南女子大学文学部教授を務められた。

先生の専門は知覚心理学の実験的及び理論的研究にあり、これらの領域で優れた研究業績を残された。特に、両眼の視野闘争、知覚判断の相対性や心理学的立場に基づく独自の知覚理論に関する研究で学界に大きく貢献された。また、学術雑誌『心理学評論』の創刊に尽力された。主な著書に、『知覚判断』、『心理学的知覚論序説』（共に培風館）等がある。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（文学部）

